

## 古くて 新しいカンキツ害虫 カイガラムシ類

### 「ヤノネカイガラムシ」について

果樹試験場 衛藤友紀

今月は、カンキツで問題となっているカイガラムシ類の一種 「ヤノネカイガラムシ」について説明します。

#### — 歴 史 —

ヤノネカイガラムシは、中国大陸からの「侵入害虫」であり、日本では1907年に長崎県で初めて確認されました。当時は効果の高い防除薬剤は少なく、さらに薬液を弾きやすい姿形から、薬剤による防除効果は得にくかったと想像できます。そのため、1960年代前半頃までは、樹体を気密性の高い天幕で覆った後、人体に毒性が高いことで知られている「青酸ガス」による燻蒸処理等が行われるほどだったようです。その後、スプラサイド剤等の有機リン系の殺虫剤が登録・普及され、さらに1980年代に入り、中国大陸から有力な天敵寄生蜂「ヤノネキイロコバチ」と「ヤノネツヤコバチ」を導入したことで、その後被害（密度）が減少しました。ところが、近年カンキツ栽培において、本虫を含めカイガラムシ類の発生が多くなっているのが現状です。

#### — 生 態 —

ヤノネカイガラムシの寄主植物はカンキツ類のみです。露地カンキツにおいては、第1世代1齢幼虫の初発は5月上中旬頃、第2世代1齢幼虫の初発は7月下旬および第3世代1齢幼虫の初発は10月頃です。なお、これまでのところ、県内における施設カンキツでの発生事例は少ないようです。

雌成虫と雄成虫の姿形は異なります。雌成虫の体長は約3.5mm程度であり、体色は写真のような濃い紫および褐色、形態は石器時代に使われていた「やじり」のような形です。雌成虫は移動することはありません。一方、雄成虫は2枚の翅をもち、自由に移動（行動）します。暑い夜に家の網戸に集まるユスリカ（ユスリカよりさらに小さいです）のような形態をイメージしてください。カンキツ園において雌成虫を見かけることはあっても、雄成虫を観察することは少ないと思います。ただし、写真に示すような、雄成虫が蛹から羽化した際の「脱皮殻」を目にすることはあるので、発見の目安となります。

#### — 被 害 —

本虫は、果実、枝幹に寄生します。果実に寄生すると、外観が損なわれますので、商品価値はもちろん低下します。着色期に寄生している雌成虫を除去しても、寄生部位は着色不良となっており、回復することはありません。枝幹に寄生した場合、同部位は衰弱して、枯死に至ることもありますので、経済的な被害は大きいです。

## —防除対策—

●耕種的防除：最も簡単な方法は寄生部位の剪除であり、薬剤防除の効果を高めるためにも必ず実施します。また、過繁茂が原因で散布薬液が到達しにくいことも防除効果低下の一要因と考えられますので、適切な剪定も重要です。次ぎに、効果の高い冬季マシン油剤の散布ができるように、健全な樹勢の維持が大切です。「樹勢が低下している樹に対しては、マシン乳剤の散布を控える」等の指導をすることが多々あります。冬季マシン油乳剤の散布は、その他カイガラムシ類およびミカンハダニ防除等にも非常に有効なので、健全な樹勢を維持出来るように（本剤の散布が出来るように）、適正な「肥培管理」、「着果管理」等の基本管理を徹底します。

●生物的防除：先述のように、日本のカンキツ産地にはヤノネカイガラムシに有力な2種の天敵寄生蜂が生息しています。これらの天敵は、主に夏季にカイガラムシ雌成虫または幼虫に対して産卵（攻撃）するので、カンキツ園のカイガラムシの密度が低く、被害が少ないならば、夏季の防除を控えます。これら天敵を保護するために、天敵に悪影響がないように冬季マシン乳剤と初夏（6月上中旬）に殺虫剤散布することに努めます。

●薬剤防除：薬液が付着しやすい幼虫の発生時期、特に2齢幼虫最多寄生時期が防除適期とされています。その時期としては、気温が比較的低い6月（第1世代幼虫）の場合、1齢幼虫初発後35～40日頃の6月上中旬頃、気温が高い8～9月（第2世代幼虫）の場合、1齢幼虫初発後30～35日頃の8月下旬～9月上旬頃とされています。防除薬剤としては、有機リン剤：スプラサイド乳剤40、エルサン乳剤、I GR 剤：アプロード水和剤、IBR 剤：コルト顆粒水和剤、スルホキシイミン剤：トランスフォームフロアブル等が挙げられます。いずれの剤も幼虫に対して防除効果を発揮しますので、防除適期を逃すことのないように、十分に注意します。

今年、早生、晩生を中心に着果量が少ない（裏年）傾向です。そのため、収量の確保はもちろん、さらに高品質果実生産を目指すためには、病害虫による被害を少なくする必要があります。今回紹介した、ヤノネカイガラムシを含め、病害虫の発生状況と気象条件をしっかりと把握して、効果的な病害虫防除を目指しましょう。



写真1  
雄成虫の脱皮殻（白）と  
雌成虫



写真2  
雌成虫と  
1 齢幼虫（黄色）



写真3  
吸汁による枝の枯死



写真4  
果実の着色不良